

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月30日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26244048

研究課題名(和文) 初期遊牧国家の比較考古学的研究

研究課題名(英文) Comparative archaeology on early nomadic states

研究代表者

臼杵 勲 (USUKI, Isao)

札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号：80211770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 25,500,000円

研究成果の概要(和文)：匈奴時代の製鉄工房・窯業址が集中するモンゴル国ホステイン・ボラク遺跡群において、匈奴国家の生産活動の解明とそれらの遊牧国家における意義の解明を目的に、各種生産関連遺跡の現地調査と土器・瓦・センの製作技術研究を実施した。その結果、遺跡群における製鉄工房と窯業址の分布状況と規模、窯址や関連遺構の特徴を明らかにした。さらに、製品が出土する周辺の土城の出土品と生産址の製品の比較を行い、生産地と消費地間の供給関係を検討した。また、出土瓦・セン・土器の製作技術の検討、周辺地域との比較研究を進め、中国北方地域との関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

紀元前3世紀から紀元2世紀に、匈奴は、ステップ地帯に最初に強力な政治体を形成し、その後の遊牧国家にも継承される統治システムを作り上げた。しかし、その生産基盤や経営の詳細は、史料の乏しさのため明らかにされていない。本研究は、遊牧国家を支えた生産遺跡に注目し、それらの実態と遊牧国家における意義の解明を目的とした。その結果、匈奴の窯業生産の実態の一端を明らかにした。本研究により、従来の単純な遊牧社会観の見直しと生産・経営という視点からの新たに遊牧国家像の構築を促す。このことは、国家概念の歴史的検討や、現在のステップ地帯における持続可能な国家経営の在り方を考える上で、重要な資料を提供できよう。

研究成果の概要(英文)：In this research for the purpose of elucidating the production activities in the Xiongnu empire and their significance in the nomadic society, the field survey of the ceramic workshop sites in Khostyn Burag site group(KBS) and the research on the technique of Xiongnu ceramic production of potteries, roof tiles and bricks were conducted. As a result, The distribution of various production workshops and their each scale in KBS, and the characteristics of kilns and related features were clarified.

Furthermore, the excavated goods unearthed from neighboring fort sites were compared with the products of ceramic kilns, and the supply relationship between production area and consumption places were examined.

In addition, the research on the production technologies of the roof tiles, bricks, and potteries and the comparative study on them with the surrounding areas were advanced, and the relationship with the northern peripheral area of China was clarified.

研究分野：北東アジア考古学

キーワード：匈奴 遊牧国家 生産 窯業 土城

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

北方草原地域では、匈奴～モンゴルなど多数の遊牧国家が形成された。しかし、それらの評価については、農耕地帯を中心とした文明観や国家観では解釈が困難な部分が存在し、かつ史料も少なくその実態に不明瞭な部分が多いことから、評価が定まっていない。そのため、経済基盤や生産力等の分析を欠きながら、史料で強調された軍事力のみが評価されてきた。しかし、近年の発掘調査により、草原地域における定着的な集落、城郭、農耕の存在、大規模な金属・窯業生産などの事実が確認され、遊牧国家・社会観の見直しが必要とされている。本研究は、新たな考古資料から、従来の征服王朝国家観とは異なる視点から遊牧国家を解釈することを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究は、紀元前3～紀元4世紀に、農耕が主産業とされていない北東アジアの草原地帯・森林地帯で生まれた政治統合体である初期遊牧国家匈奴の形成過程と性格・特性を、生産基盤・集落都市形成・中国・中央アジア等との地域間交流等に注目し、さらに後世の諸遊牧国家との比較を行いながら、考古学的に検討・解明することを目的とする。この作業により、従来の農耕中心地域をモデルに形成された国家観とは異なる草原地域の政治権力形成過程をモデル化し、従来の遊牧国家＝軍事国家・征服王朝のモデルとは異なる新たな遊牧国家観を確立し、さらに、諸遊牧国家間の生産・国家システムの継承の実態、くりかえされる興亡の要因等についても再考しようとするものである。

### 3. 研究の方法

初期遊牧国家匈奴の国家経営実態を、土城・生産遺跡が集中するモンゴル・ケルレン川上流域の現地調査(発掘・一般調査)、モンゴル・ロシア・中国等の関連地域における資料調査、考古学的研究(年代測定・材質分析・被熱分析、人骨等の人類学的検討、動植物遺体同定)を併用して、集落・都市の形成・経済基盤を主要な視点において、明らかにする。さらに、中国・中央アジア・極東等の周辺地域との地域間交流の実態や遊牧国家間の継承関係を、関連する考古資料の比較・分析から進める。以上の成果から、草原地域における国家形成・経営モデルを考察する。さらに、関連各国との共同研究、全体会議、国際研究集会を通して、調査研究内容の検討を進め、成果の総括を図る。

### 4. 研究成果

- (1)モンゴル・ケルレン川上流域に位置するホスティン・ボラク遺跡群の一般調査を実施し、青銅器～モンゴル時代における遺跡群の分布状況を明らかにするとともに、匈奴時代の生産遺跡の分布と広がりを確認した。その結果、平坦な河岸段丘上の東西約7km、南北約2kmの範囲に、製鉄工房群と土器・瓦窯跡が、それぞれまとまりをもって分布することが明らかにされた。窯址群は段丘の東南部に点在し、製鉄炉は段丘西端部に集中しており、工房の種別によって区域を分けていることが確認された。また、窯址近くに竪穴住居・建物址の存在が確認された。さらに瓦工房と土器工房については場所を変えている可能性があることも確認した。
- (2)一般調査中の試掘と発掘調査において確認した遺構より年代測定試料を採取し、各遺構の年代を検討した。その結果、製鉄工房については、BC3世紀とBC1～AD1世紀、窯址についてはBC1～AD1世紀に年代が集中していることが確認された。いずれも匈奴時代には収まるが、窯址群については、その後半期に集中することが明らかとなった。
- (3)ケルレン川上流域の3か所の匈奴土城において、位置情報の取得とドローンを用いた測量、さらに土器・瓦・センの表面採集を行った。この作業により、土城の規模と形状を詳細に明らかにした。また、採集品と窯址出土品の比較検討により、特に最も北部に位置するテレルジ土城に、ホスティン・ボラク3窯址の製品が供給されていることを明らかにした。一方、他の土城については、未確認の窯址からの供給が想定できる。
- (4)土器・瓦の技術的検討と製品の中国・ロシア出土品との比較検討により、土器については詳細な土器編年の構築についての見通しが得られた。また、瓦については、同時期の長安城などの中心地域ではなく、内蒙古など中国の北辺地域の技術に近く、またやや古い戦国時代の技術との共通性も確認され、技術的な系譜やそれらの導入の様子を具体的に明らかにできた。
- (5)窯址の形態を詳細に明らかにし、導入元と考えられる中国の窯址との比較検討を実施した。その結果、製品と同様に窯についても中国の北辺地区との共通性が確認できた。また、壁体の熱分析から焼成温度が800度以下と比較的低いことも確認した。
- (6)窯址周辺で磁気探査を実施し、数か所に異常地点を確認し、工房の広がりについての情報を得た。また、約200m西に集落跡が存在する可能性も確認した。
- (7)周辺の匈奴時代の墳墓群についても一般調査を行ったが、大型墓・大墳墓群は存在しないことが確認できた。
- (8)他の生産活動についての知見を得るため、土壌サンプル・土器レプリカ調査を行った。土壌からは栽培種を検出できなかったが、土器レプリカからは穀粒が確認でき、栽培穀物の存在が明らかになった。また、モンゴル国立大学・モンゴル科学アカデミー所蔵の匈奴人骨の調査に着手し、遺伝・病理・食性等のデータの蓄積を進めた。
- (9)その他に、年代決定等の比較資料として、モンゴル・ロシア国内における墳墓等の出土資料

の調査、遺跡巡検を実施し、実測・写真撮影等の資料化を行い、年代研究に活用した。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

臼杵 勲、佐川正敏、松下憲一、匈奴の建造物・住居、人文学会紀要、102号、2017、31-51、  
査読有、<http://hdl.handle.net/10742/00003059>

臼杵 勲、笹田朋孝、木山克彦、近年のホスティン・ボラグ遺跡(匈奴の生産址遺跡群)の  
調査、金大考古、75号、2017、24-35、査読有

笹田朋孝、モンゴルにおける日本隊による考古発掘調査(2015年)、日本モンゴル学会紀要、  
46号、87-89、査読有

Ch. Amartuvshin, G. Eregzen, L. Ishtseren, T. Sasada, I. Usuki, K. Kiyama, M. Sagawa, Mongol  
Yapony khmtrasan, "Ertnii nuudelchdiinuiildv epleliin tusliin" 2014 ony kheeriin  
shinzhilgeenii azhlyn ur' dchilsan ur dun, Mongolyn Arkheologii 2014, 2015, 106-115、  
査読無

〔学会発表〕(計9件)

I. Usuki, M. Sagawa, K. Kiyama, T. Yanagimoto, K. Matsushita, Kilns, roof tiles, and bricks  
of the Xiongnu period found at Khustyn Bulag site No.2 and No.3, International conference,  
Xiongnu settlements and history of ancient craft production, 2018, Baganuur

柳本照男、臼杵勲、佐川正敏、木山克彦、内田宏美、ホスティン・ボラグ2・3遺跡の匈奴瓦  
センと窯、2018 Asian Archaeology 国際学術シンポジウム(韓国国立文化財研究所)、2018、  
大田

Isao Usuki, Katsuhiko Kiyama, Features of kilns of Xiongnu and Khitan in Mongolia, 8th  
Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, 2018, 南京

Isao Usuki, Teruo Yanagimoto, Ch. Amartuvshin, Importance of Khustyn Bulag site in the  
study of Xiongnu History, 8th Worldwide Conference of the Society for East Asian  
Archaeology, 2018, 南京

佐川正敏、從東北亞的視角看古代制瓦技術和セン瓦窯、第3回"発現長安"考古論壇:中国  
社会科学院考古研究所(国際学会)、2018、西安

P. B. Kononov, I. Usuki, Inscription of Iron sword unearthed from Cheryomukhovaya pad  
cemetery No.39 grave, Actual problems of Archaeology and Ethnology of Central Asia, 2017,  
Ulan Ude

Tomohito Nagaoka, Yoshinori Kawakubo, Hajime Ishida, Kazuaki Hirata, Mayagmar Erdene,  
Bioarchaeology of the human skeletal remains from Mongolia: a preliminary study, 第1  
回古病理学研究会大会, 2016, 東京

笹田朋孝、北アジアの初期鉄生産-匈奴を中心に、古代世界の鉄生産-中近東からアジアまで、  
東アジア古代鉄文化研究センター第8回国際学術シンポジウム、2015、大阪

小畑弘己、匈奴と穀物、第13回北アジア調査研究報告会、2015、東京

〔図書〕(計1件)

Ch. Amartuvshin, I. USUKI, M. Sagawa, K. Kiyama, L. Ishtseren, T. Sasada, G. Eregtsen, Zuun  
Baidlagiin golyn sav dakh' arkheologiiin dyrcgaluud, 287頁, 2018, Institute of History  
and Archaeology, Mongolian Academy of Sciences

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://www.facebook.com/zuunbaidrag/?ref=bookmarks>, History of ancient Mongolian Craft Production

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：小畑 弘己

ローマ字氏名：OBATA Hiroki

所属研究機関名：熊本大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80274679

研究分担者氏名：坂本 稔

ローマ字氏名：SAKAMOTO Minoru

所属研究機関名：国立歴史民俗博物館

部局名：情報資料研究系

職名：教授

研究者番号（8桁）：60270401

研究分担者氏名：石田 肇

ローマ字氏名：ISHIDA Hajime

所属研究機関名：琉球大学大学院

部局名：医学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：70145225

研究分担者氏名：高瀬 克範

ローマ字氏名：TAKASE Katsunori

所属研究機関名：北海道大学大学院

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00347254

研究分担者氏名：笹田 朋孝

ローマ字氏名：SASADA Tomotaka

所属研究機関名：愛媛大学

部局名：法文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：90508764

研究分担者氏名：木山 克彦

ローマ字氏名：KIYAMA Katsuhiko

所属研究機関名：東海大学

部局名：清水教養教育センター

職名：講師

研究者番号（8桁）：20507248

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：長岡 朋人

ローマ字氏名：NAGAOKA Tomohito

研究協力者氏名：内田 宏美

ローマ字氏名：UCHIDA Hiromi

研究協力者氏名：佐川 正敏  
ローマ字氏名：SAGAWA Masatoshi

研究協力者氏名：柳本 照男  
ローマ字氏名：YANAGIMOTO Teruo

研究協力者氏名：松下 憲一  
ローマ字氏名：MATSUSHITA Kenichi

研究協力者氏名：イシツェレン ロチン  
ローマ字氏名：ISHTSEREN Lochin

研究協力者氏名：アマルトゥフシン チュナグ  
ローマ字氏名：AMARTUVSHIN Chunag

研究協力者氏名：クラージン ニコライ  
ローマ字氏名：KLADIN Nikolai

研究協力者氏名：カナヴァロフ プラコピー  
ローマ字氏名：KONOVALOV Prokopii

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。